



ある休日のこと

父さん母さん

オレ彼女と
結婚するわ

は、はじめまして

就職を機に実家を出て
独り立ちしていた兄が

突然婚約の報告をしに
帰ってきた

それまで兄に彼女が
いたことすら
知らなかった俺や
両親にとって

……!

それはまさに
青天の霹靂…
へきれき

とんでもない
サプライズだった

あの
兄ちゃんが…

結婚…!?

ぞわ..





サトル？
もうお昼だし
すぐに帰って
くるわよ

あっお昼
お寿司でも
取ろっか

おっ
いいね
寿司



そそんな
ことより
サトルは
まだ帰って
こないの？



綺麗で
感じの良い
女性だよな

兄ちゃん
の婚約者……

ジュー……

そそう言えば
もう一人
弟さんがいるん
だったね

そうそう
帰ってきたら
紹介するよ

……



この家には
関わりないほうが
いい……



兄ちゃんは
やめとけ……

だからこそ……
もし許される
ことなら
俺は彼女に伝えて
あげたい……

我が家には
闇がある

俺がそれを
目の当たりに
したのは
○歳の頃：

夏休みも終盤に
差し掛かっていた
ある日の昼下がりに

外で友達と
遊び終えて
帰宅した直後の
ことだった



その妙に
聞き馴染んだ
声音に胸騒ぎを
覚えながらも



家に入るなり
両親の寝室から
漏れ聞こえてきた

露骨に卑猥な声：

怖いもの見たさが
先立って

俺はつい寝室の
様子を覗いてしまい：



それはまさに
目を疑うような
光景だった：

後にも先にもこの時ほど
人生において大きな衝撃を
受けたことは他にない

俺はその日
触れてはいけない
闇に触れて
しまったのだ：

自分の中の
家族観が
瞬時にして
一変するほどの
深い闇に……

あぁんっ
はぁめ



あぁ
聡太っ……

聡太っ……

おかーさん
も……

もう
イキえ……







何よコレえ...っ!



あッ

ちちよつと...っ

ほん、ほん、ほん



その頃はお互い
こんな関係になる
なんて考えも
しなかったよな...

イヤよ
こんなのお...

プレイだよ
ほらちゃんと
見て

い言うな...ッ

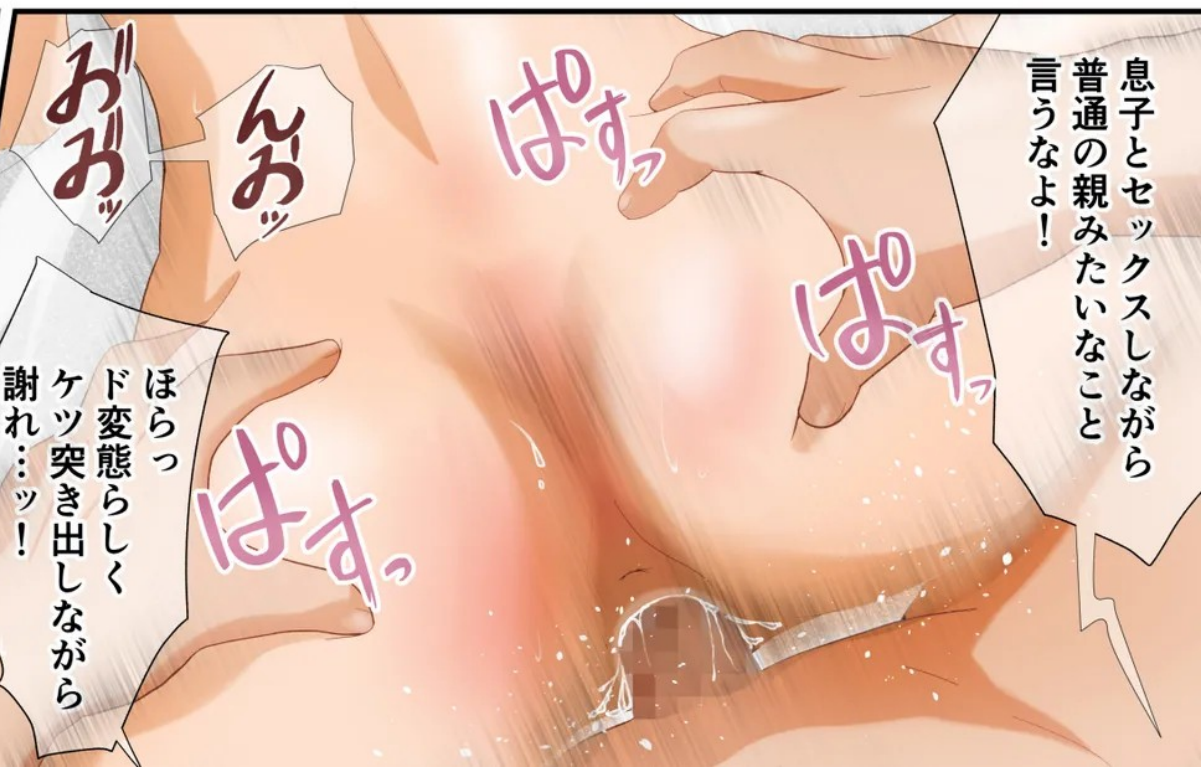
あッ

ギッ

ギッ

ギッ

ギッ





あゝもう
我慢できないよ
母さん！

ぶっ
かけたい…ッ

父さんと
タケルの前で…！

ひあッ

あッ

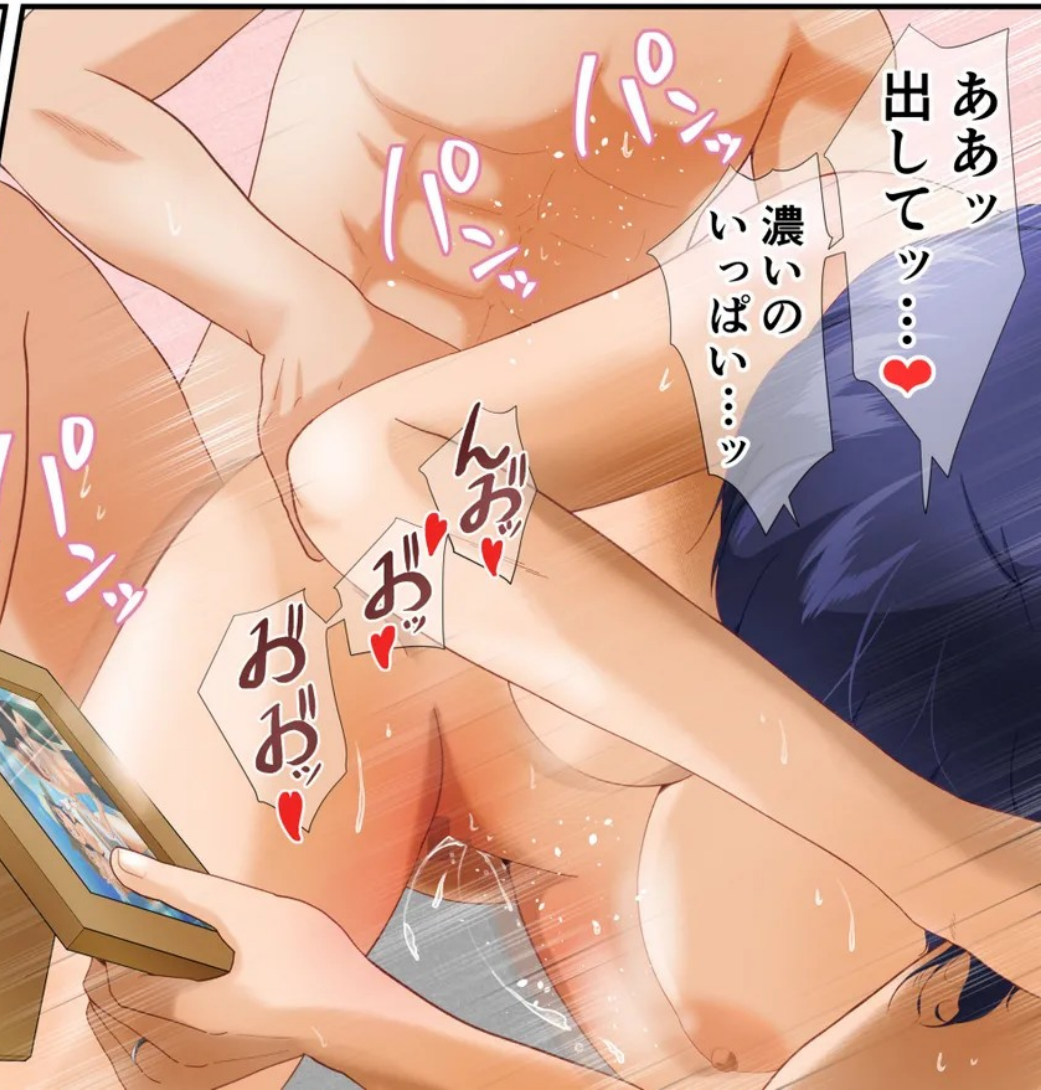
あッ



おかーさんに
ぶっ
かけてえ…ッ！



ヌッ



ああッ
出してッ…

濃い
の
いっ
ぱい…ッ

んおッ

おッ

おッ

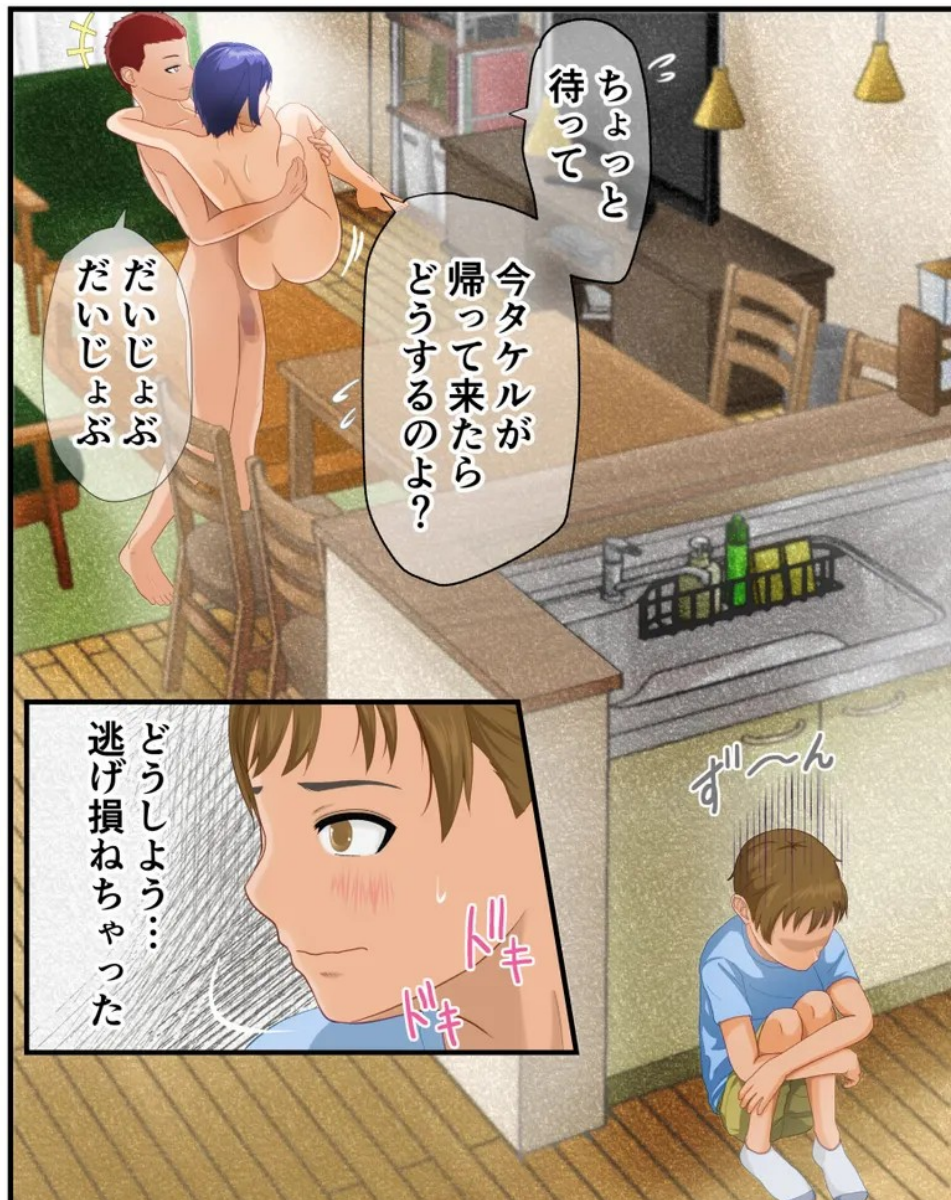


なあなあ
今度はあるうちの
部屋でやろうぜ

えっ? ちょっと
きやあつ



この...
親不孝者...



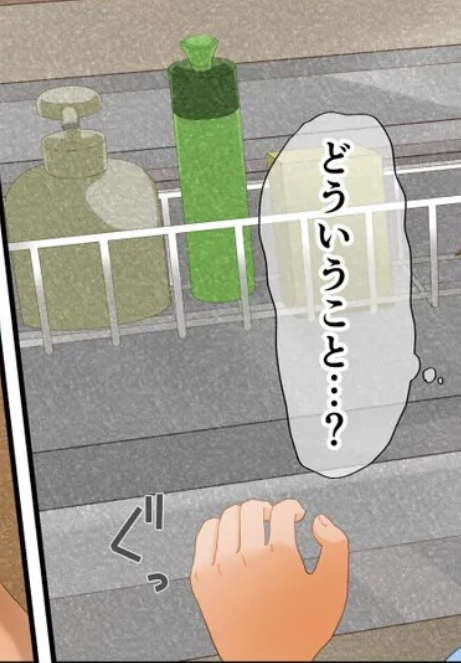




お母さんが
兄ちゃんの
チ○チンを
くわえてる...!?



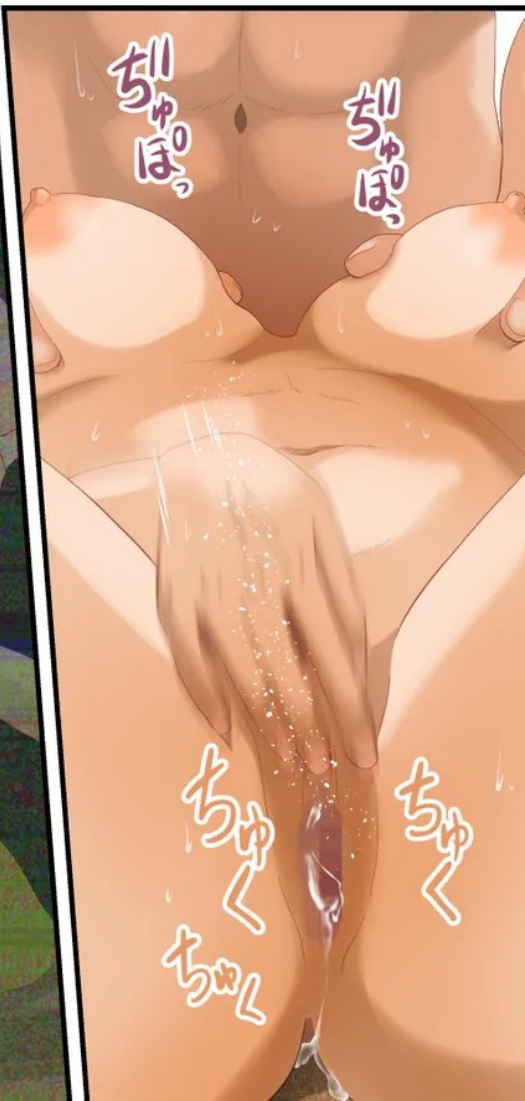
何あれ...?!



ぐっぽぐっぽぐっぽ...



いつも家族で
ご飯を食べている
テーブルの上で
こんなことを
するなんて...





飲んで!

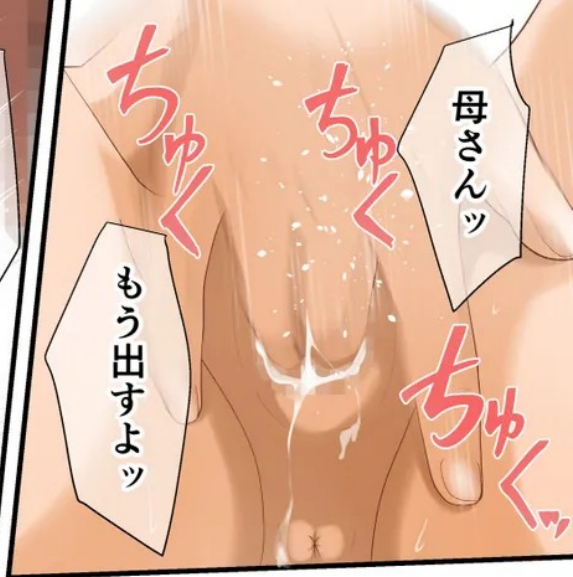
ちゅるちゅる



飲んでッ

んもッ

んもッ



母さんッ

もう出すよッ

ちゅく

ちゅく

ちゅく



おおッ

出る……ッッッ

とびひゆる

みこッ

ちゅるちゅる

ビクン
ビクン

んんッ

ドクン

ドクン

んんッ

んんッ

ビクン
ビクン

カクカク



とろよ...
とろよ...

ビクン
ビクン

ビクン
ビクン

ハア
ハア
ハア

んんん
んんん



はっあ

ねも
ねも

ちゅ.

んれえ...

ハア
ハア

うっ
うっ



おかしさんも
もうクタクタよお...

ねえったら...

うう...
なかなか
逃げ出す
チャンスが
ない...



はあはあ...
聡太あ...
もういい加減
タケルが帰って
来ちゃうわよ



いくら吸っても
もう母乳なんか
出ないわよ?



あんっ♡
れろお!



もうっ
さっきから
ずっとオッパイ
ばっかり...
赤ちゃんに
戻っちゃった
のかしら?



じゃあ
また母乳が
出る体にして
やろうかな



バカね
ピル飲んでるから
デキないって

わかってる
くせに…っ

あ♡

ギョ



最後の一発は
中出し種付けと
いこうか

はあ♡

あ♡

あ♡

ん♡

ド！ツチュ

ド！ツチュ

ギョ

ギョ



はあ♡

はあ♡

うっふふ

まあ

こわい…♡

はるん



ギョッ

ギョッ

ギョッ

ふははっ

この世に
"絶対"
なんて無いと
思いきらせて
やる





空が赤らみ始めた頃
ようやく俺は自宅を
脱出することができた

結果的に母と兄に
鉢合わせするといった
最悪の展開だけは
免れたものの

俺はその日
生涯誰にも口外できない
秘密を抱えることにな
ってしまったのだった



そして月日が
流れること
およそ〇年…

今となつては
あの日の記憶を
思い返して悶々と
するようなのは
ほとんど
無くなったけど

兄ちゃんのせいで
久しぶりに嫌なもん
思い出しちやっとなあ…



それにしても…
改めてこんな闇深い家に
嫁ぐ羽目になってしまった
相手の女性が気の毒だ

かと言って
こっちは身内として
ペラペラ秘密を喋る
わけにもいかないしなあ…



ガチャ…

ただいま…



